

特集 この人に聞きたい

中学校教育に望むこと

スポーツ庁長官

鈴木 大地 先生



鈴木 大地（すずき だいち）先生（略歴）

スポーツ庁長官

一九六七年 千葉県習志野市生まれ

一九八四年 ロサンゼルスオリンピックク 一位

（二〇〇メートル背泳ぎ）

一九八六年 アジア競技大会（ソウル） 金メダル

（二〇〇メートル背泳ぎ、四〇〇メートル

メドレーリレー）

一九八八年 ソウルオリンピックク 金メダル

（一〇〇メートル背泳ぎ）

一九八九年 順天堂大学体育学部体育学科卒業

一九九三年 順天堂大学大学院体育学科研究科コーチ学

専攻修了

二〇〇六年 順天堂大学スポーツ健康科学部准教授

二〇一一年 公益財団法人日本オリンピック委員会評議員

公益財団法人日本水泳連盟常任理事

二〇一三年 順天堂大学スポーツ健康科学部スポーツ科

学科コーチング科学コース教授

公益財団法人日本オリンピック委員会

常任理事

公益財団法人日本水泳連盟会長

二〇一五年 初代スポーツ庁長官に就任

二〇一六年 アジア水泳連盟副会長に就任

二〇一七年 国際水泳連盟理事に選出

\*バサロ泳法で成し遂げたソウルオリンピックでの金メダルは日本中に感動を与えた。スポーツ庁長官として現在も活躍中である。

編集部 今日はお忙しいところありがとうございます。

東京オリンピック・パラリンピックもあと二年ということで、ぜひ鈴木大地スポーツ庁長官からお話を伺いたいという声がたくさん上がりまして、本日に至った次第です。どうぞよろしく願います。

今日は、三点の質問をさせていただきます。一点目が日本の体育や健康に関わる教育について、二点目が、その在り方がいろいろと議論されています部活動について、三點目は、二年後に迫った東京オリンピック・パラリンピックにおいて中学生にどのようなことを期待したいかということについてです。全国の校長に向けて、エールや、御指導、御助言をいただけたらと思います。

では、一点目、日本における体育や健康に関わる教育について、どのようなことを期待して、今後どんな展望をおもちなのか、そして中学校の校長はどのようにあつてほしいと思つていらっしゃるかを伺いたいと思います。

鈴木長官 日本のスポーツは、教育から大分影響を受けていて、教育という要素で発展してきたという歴史があります。一方で、我々が調査したところ、世の中には、スポー

ツのことを理解して「いいね」と言っている人もいれば、「スポーツは嫌いだ」と言っている人もいます。そういうスポーツの嫌いな人たちにいろいろ話をお聞きすると、どうやら小学校や中学校や高校で受けた体育の授業でスポーツ嫌いになってしまっているようです。そういう情報や分析から、学校の体育の授業の内容を変えていこうと考えています。技術指導に偏らず、もともと体を動かす。人間がもつ本能的な欲求を重視して、「体を動かすことは楽しいんだよ」ということを授業に盛り込んでいけるような授業展開というのをこれから考えていきたいと思つています。まずは体を動かすことが非常に重要であり、楽しいんだよということを皆さんと共有させていただきたいと思つています。

また、今日の日本の医療費というのが国家予算の中で大きな割合になっていきます。自らの健康を自ら獲得するライフスタイルというのが、非常に重要になってくると思つています。スポーツや運動の習慣付けをするのに、若いときの習慣というのは大きな影響を及ぼして重要なんです。学業も非常に重要ですが、それと同時に、学業も継続していくた

めには体力が必要ですよ。さらに、医療費も軽減できる。そういう健康リテラシーのような考え方を校長先生中心に学校で周知していただきながら、受験の科目にないからといって軽視することなく、保健体育は実は一番重要な科目の一つじゃないかと思っていますので、授業、そして部活動等で心身を鍛えるというようなことを奨励していただきたいと思います。

**編集部** 長官は、子供の頃受けた保健体育の授業で、今でも「あの授業はよかったな」というものはありますか。

**鈴木長官** 全員が全員同じものに取り組まなくてもいいですし、選択制の中で「自分はこれがいいな」とか、選べるくらいでもいいと思っています。オリンピック競技だけでも今三〇競技以上あるわけで、体格とか成長度合いとか、当然趣味とか嗜好とか、それぞれですので、もつともつと選択しながら、「自分はこれが好きだからやっている」、そういうのがあってもいいのかなと思っています。

**編集部** 国民は皆、鈴木長官といえば水泳というイメージですけれども、中学生の頃や小学生の頃は他のスポーツもやられていたんですか。

**鈴木長官** やってましたよ。小学校のときは、走るのも速かったですし、マラソンも速かったです。いろいろやっていたけれども、中学校になってからは水泳を集中してやるようになってしまっただけで、あまり他の競技をやる機会はなくなりました。球技大会でバレーボール等をやった記憶はありますけれども。

私、背がすごく小さくて、中一のとときに一四一cmしかなかったんですよ。小柄だったので、そういう人には小柄な人が楽しんでやれるようなスポーツを選べるといいですね。

**編集部** これからの中学校の生徒たちは、先ほど言われたように、選択していろいろなものに取り組んで、その中から自分がやりたいものを見つけていってほしいということですね。

**鈴木長官** そうですね。授業も、冬は持久走とか、何となく決まっていたりするんですけども、もう少し選択の幅があってもいいと思います。これから我々も工夫していきますけれども、もう時代も変わってきていますので、学校からもいろいろ御意見をいただきたいと思っています。

バレエボールとかサツカーとかソフボールとか、いろいろあると思いますけれども、これからは基本的に体力をつけるような、エクササイズのような授業でもいいと思いますし、生涯にわたって続けられるような、そういう種目をやってもいいかもしれません。ヨガとかね。これからのいろいろ考えていかなければいけないと思っています。

**編集部** 生徒はダンスの授業は大好きですよね。

**鈴木長官** ダンスは好きですね。

**編集部** 我々の時代にはなかった授業です。

**編集部** 以前と比べて子供たちにとってダンスが身近になったというのがあると思います。

**鈴木長官** 昔はフォークダンスみたいなのがダンスだと思っていましたけれども、今はジャズダンスやモダンダンスなど、いろいろなダンスがありますね。

**編集部** 女子の三学期のカリキュラムの中にダンスがあるのですが、放課後残って班ごとに創作ダンスをつくるなど、保健体育の授業の中ではひよっとしたら一番人気かもしれません。

**鈴木長官** 我々、ダンスには本当に注目しています。ダン

スというのは芸術でもあったり文化でもあったりするので、女子は特に、普通の保健体育の授業は嫌いだけでもダンスだったら好きな生徒もいます。体を動かすことには違いがないので、どこが入口でもいいんですけれども、最終的に楽しく体を動かしていただければと思っています。そういう意味ではダンスには注目しています。

我々が体を動かしてもらいたいという根拠は、血流量を増やすことが脳や体に非常にいいということが、今、最先端の医学で言われています、中学生のうちあまり関係ないのですが、どんどん年をとっていくと、脳の海馬というところが年に一％ぐらい萎縮していく。ところが、血流量を多くしていくとまだ大きくなるんです。一例ですけれども、海馬が発達していくことで、認知機能が高まり認知症にならないとか、鬱にもなりにくいか、精神衛生上大変いいと思いますし、医科学的に体を動かすということが必要なんです。どんなに頭のいい人も勉強に熱心な人も、体を動かすということが必要なんです。ですから、どんな生徒さんにも、スポーツ選手になるならならに問わず、特に中学生の頃は必要だと思っています。

**編集部** 今スポーツと勉強というのは二極対立しているよ  
うなところがあるんですけども、脳の発達にいい影響を  
与えるという点で、スポーツと勉強が絡んでいるといふこ  
とですね。

**鈴木長官** アメリカなどでも、学力を上げるために朝走ら  
せるとか、地区でパイロットのいろいろなことをやりな  
がら、このことを証明しつつあります。

また、人間は進化の過程で野生の中で生き延びてきたと  
いう大昔からの歴史があるので、海に行ったり山に行つた  
り自然の中に身を置いて、できれば長い期間そういう体験  
をする。臨海学校とか林間学校とか、いろいろ実施されてい  
ると思いますけれども、ああいうのも本来必要なんですな。  
**編集部** 子供たちは外で遊ばなくなっているし、部活動以  
外に運動の機会がないという状況があります。

**鈴木長官** 特に都会はそうした傾向が強いですね。

**編集部** 運動している子とあまりしていない子が二極化し  
てしまっているというのは、子供たちの生活を見ていてす  
ごく感じます。今長官が言われたように、どの子でも体を  
動かすことが楽しくなる、そういう習慣を身に付けて大人

になっていくということは我々も必要だと思って、何とか  
運動をさせようとは思って取り組んでいます。

**鈴木長官** 特に有酸素運動とか、朝走り回るとか、なか  
か難しいんですけどもやってほしいですね。

**編集部** ゲームとかスマホ、そういったものからいかに子  
供を外に引き出すか、運動する環境に引き出すかというの  
は難しいところですね。

**鈴木長官** 本当ですね。うちも中学校二年の息子がいますが、  
隙さえあるとゲームをやるうとしますね。部活動はやって  
いますが、隙さえあれば家の中に籠もってやるうとします。  
**編集部** 息子さんは、部活動は何をやられているんですか。  
**鈴木長官** ラグビーをやっています。

**編集部** それは自分でラグビーをやりたいと言いだしたの  
ですか。

**鈴木長官** 小学生の頃から少しやっていたんですけども  
やりたいと言いました。自分の息子を見ていても皆さんが  
言われる悩みは、よく分かります。

**編集部** ゲームに行ってしまう子たちも、授業だともちろ  
ん保健体育はやらなくてはいけないから、そういう中で体

を動かすということではできるんですけども、やらされる感になってしまつて、逆に保健体育や運動が嫌いだとなつてしまう。それもまた逆効果だと思えますから、いかに子供たちが体を動かすことが「楽しい」というところにもつていけるかというのが今学校教育に求められていることで、頑張つていかななくてはいけないことだなと思います。

**鈴木長官** 我々も、保健体育の授業を含めて、いろいろな意見をいただきながら考えていきたいと思っています。

**編集部** 次に、部活動のことについて伺います。

部活動については、ガイドラインを出していただきました。ガイドラインに基づいて今中学校では、一日の活動時間ですとか一週間の活動日ですとか、見直しを図っているところですよ。部活動については、改めてどんな思いがありますか。

**鈴木長官** まず、中学校、高校の先生方が大変お忙しい。働き方改革といいますが、そういう見方が一つ。それからもしかすると校長先生から



「○○先生、バスケット部の顧問になってください」とお願いされたり、あるいは強制的に部活動の顧問にさせられたりするケースもあると聞いています。先生方も気の毒ですが、一方で被害者は生徒さんだったりするわけですね。

知識もない、積極的でない、時間もない、こういった先生たちが仕方なく、あるいは間違つた方法で指導されている可能性もあります。こういう状況がある中で、我々は改革していかなきゃいけないということで、専門家、民間の方、スポーツ団体、中体連、高体連、こういったところから話を聞いてきまして、「運動部活動の在り方に関する総合的なガイドライン」をまとめました。

その中で様々なことをお願いしていきますが、これから大きな流れとしては、部活動は地域といいますが地元のコミュニティに任せていく方向になっていくと思います。ただ、学校の先生の中には部活動をやりたくて教員になったという方もいらっしゃると思います。我々は、そこまで取り上げるわけはありません。例えば、四時までは学校の先生、五時からは地域の部活動の指導員として、ちょっと立場を変えて教えればいいと考えています。中学校の先生

や高校の先生が、部活動をやれないというわけじゃないんです。それは大きく誤解されているところで、ちょっと立場を変えていただくということですね。

こういう話をしていたときに、いろいろ意見が上がってきたのは、我々は教育でやっているんだから、地域の人たちに任せるわけにはいかないという教員の皆さんからの反発です。これは我々もよく分かりますので、地域の部活動を指導する人たちに対して、教育とは何かという、教育原理等、いろいろな教育の項目を学んでいただく。また、部活動の指導をしたいという教員の皆さんには、そのスポーツがどういうものかとか、スポーツのトレーニングの原理原則とか、そういったことを学んでいただいて、お互い補完し合いながら、部活動の指導をしたい人にはしていただくということですね。やる気があって知識もなく(古く)、自分の独自の方法で指導されてしまうのが一番困るんですね。ですから、お互いが必要なことを勉強して部活動にあたっていくようにしていきたいと思っています。

**編集部** 立場を変えて部活動の指導にあたるというのは今初めて伺ったんですけれども、この話は今後周知されると

いうことですか。

**鈴木長官** いやいや、もう言っていたつもりなんですけれども、まだまだ伝わっていないなかつたようですね。

**編集部** 知りませんでした。

**編集部** 今までの外部指導員や卒業生がお手伝いすることはありましたが、今後は部活動指導員という形で、引率もできるといって体制に移行していくというのは理解していません。

**鈴木長官** 去年の四月に学校教育法施行規則を改正して、部活動指導員が学校職員等として引率もできるようになりました。同時に、ライセンスといいますか、きちんと指導できる人だという形にして、安心して親御さんたちが生徒さんを任せられるような、そういう仕組みをつくっていかなければならぬと考えています。そのためには、外部の指導者の皆さんには、いろいろ教育のこと、それから指導するためのライセンス、例えば日本スポーツ協会が出しているものをこれから取得していただくなど、しっかりとしたライセンスをもっている人が教える、安心して指導を受けられるようにしていきたいと思っています。

**編集部** ということは、今中学校も若い先生がどんどん入ってきて、世代交代というか、大量退職期に入っているのですけれども、十分なスポーツ理論だとか指導理論だとか、そういうものを大学でちゃんと身に付けたり、教員養成課程の中でそういう講義を受けてきたわけでもないのに、我々教員も、顧問をやるにあたっては、一定の知識とか理論をちゃんと身に付けて子供たちと一緒に部活動をやっていくという体制に今後はもっていくことですね。

**鈴木長官** 確かに、その辺の細かい話まではガイドラインに書いてなかったと思いますけれども、しっかりそういう方向にしていかなければいけないと思っています。先生といてもいろいろな先生がいますので、やる気だけあって、知識が不足している中で自分なりの方法で教えてしまうというのは困るんですね。

**編集部** 先生方を見ていると、自分が中学校や高校の頃に指導してもらったことが基になっていることが多いように感じます。

**鈴木長官** そうなんですよね。特に暴力的な指導とか、自分がやられてきたので自然にやってしまう場合があります

が、今は時代も社会も変わりましたので、そういうことを含めて指導のイロハをしつかり学んでいただくことが必要かと思えます。

**編集部** 長官は、中学時代はだんだん水泳に専念していた時代だと言われていましたけれども、指導を受ける中で、つらいなとかおかしいなと思うこともありましたが。

**鈴木長官** もちろんありました。中学校のときは部活動ではなくてスイミングクラブで、学校が終わったらすぐに行くという感じだったんですけども、昔はスイミングクラブでも暴力的な指導がありました。でもそのときは、頑張らなかつたんです。頑張っちゃうと、それをやったら速くなるものだと指導者が思ってしまうので頑張らなかつたんです。

**編集部** そこまで考えていたんですね。

**鈴木長官** だって、速く泳いじゃったら、次からも同じことをやられますから。頭にくるだけです。

**編集部** もう水泳をやめようかなと思った時期はありましたか。

**鈴木長官** ありました。中学校のときも思っていましたね。



**編集部** それはどんなことがきっかけですか。

**鈴木長官** 中学校のときは、将来水泳で日本を代表できるようなになるとか、オリンピックでメダルを取るといふ確信がまだないわけですよ。ですから、普通の中学生と一緒に高校を受験したりして普通の人生を歩まなきゃいけないのかなという、そういう迷いがありました。でも、やっていることは結構つらくて、夜家に帰ってくると十時半とかで、へろへろになって、そこから勉強しようなんて気も起らないんですけれども。

**編集部** 中学校の頃はどのぐらい水泳の練習をされていたんですか。

**鈴木長官** 五時過ぎに家に帰って、六時から練習です。六時半から実際に泳ぎ始めるんですね。それで、八時半、九時ぐらいまで泳ぎます。その後、着がえて、電車に乗って帰って九時半とか。

やっていることはつらいんだけど、将来自分が本当に強くなって、それで身を立っていきえるかという不安——確信がないわけですから、こんなこととしていいのかなとか、しょっちゅう思うわけですよ。勉強もしなきゃいけ

ないなとかいろいろ考えながら、迷いますよね、やっぱり。

そういうときに、スイミングクラブの指導者が「おまえは将来オリンピックに行けるから頑張り」と言ってくれました。こんなのは口約束ですけども、そうかなと思いがら頑張りました。

**編集部** やはりオリンピックという言葉は大きかったんですか。

**鈴木長官** そうですね。

**編集部** 私もちよっとスイミングをやっていて、挫折したほうの組ですけども、バサロで世界中誰もが長官のことを存じ上げておりますし、まさにアスリートとしては夢がかなえた形で、今や日本のスポーツ界の頂点に立たれている。そういう意味では、トップアスリートの最高の形で今そこにいらつしやると思うんですね。

**鈴木長官** そんなことはないんですが、たまたまいい指導者に巡り会ったり、いい練習環境があつてオリンピックとかなに行かせていただきましたから今があります。けれども、実は多くの人がオリンピックに行けないわけですよ。ということ、部活動の話に戻しますけれども、部活動もや

り過ぎではなく、しっかり学業も修得していきましよう、  
そういう話をしているんですね。

もう一つ言うと、部活動の先生が熱心過ぎて、やらせ過ぎてしまう場合があります。ひじが痛くなった、肩が痛くなった、膝が痛くなった。中学校、高校を卒業した時点でそのスポーツは卒業。バーンアウトしたり、けがをしたり故障したり、できなくなったり、そういう例もありますので、我々としては、中学校、高校までの部活動の総量を少し抑え目にして、まずけがをさせない、将来もっともっと発展できるような形で高校や大学や社会人に送っていく、それが大事だと思っていますので、やらせ過ぎないということをまず念頭に置いてこのガイドラインも作りました。抑えた分、もっと生涯にわたってスポーツをやってもらう、けがも未然に防ぎ、バーンアウトもしない、そういう形で、将来に向かって生涯スポーツの方にシフトしてもらいたい、そういう気持ちでこのガイドラインを策定しました。

**編集部** 部活動の顧問で一生懸命やっている先生は、この子供たちに勝つ喜びを味わわせてあげたい、そういう思いで一生懸命やってしまって、結果的にやり過ぎになったり、

子供たちが「このスポーツはもういい」という気持ちになってしまっているという面があるのではないかと思えます。

**鈴木長官** 勝たせることで学ぶこととか、喜びを味わわせるというのはよくわかりますが、生徒さんたちの人生というの、その三年間だけじゃなくて、今後も続いていくものなんですね。中学校の先生や高校の先生というのは、三年間で何とか結果を出したいと考える、それはどっちかというと教員のエゴと言ったら失礼ですけども、思いが強過ぎたりする部分があります。将来にわたって生徒さんの人生というのは続いていきますので、勝利させることも大事かもしれませんが、スポーツを嫌いになることなく、無駄なけがをさせることなく、いかにいい人生を送るかという中で三年間を過ごさせるかということを考えてほしいです。

**編集部** 生涯にわたってということですね。

**鈴木長官** そこで人生が終わるわけじゃないので。

**編集部** 子供たちの人生はまだまだ続く。

**鈴木長官** むしろこれからですよね。

**編集部** そういう視点に立って先生たちは指導しなければ

いけないし、もちろん、これから入ってくる部活動指導員の方々もそういう視点で一緒になって指導していかなければならない。

**鈴木長官** そうですね。

学校の保健体育や部活動でなくクラブスポーツは、水泳もそうなんですけれども、一貫指導になっていきます。何年だからとかあまり関係がなく、生涯にわたっていい指導をするためにはどうしたらいいかという視点で考えますので、その辺が大きく違うところですね。長期的な視点で物事を考えてもらえる。中学校は三年間ですけれども、そういうふうにかけていただけるように指導をお願いしたいと思っています。

**編集部** スポーツ庁はこうやってガイドラインを出したりしてくださっているんですけれども、学校では、文化系の吹奏楽部等も同じように長時間活動しています。でも、それは文化庁の話ですと言われてしまうことがあるんですけれども、スポーツ庁と文化庁との連携というか、一くくりで部活動を考えていただくということについてはどのようにお考えでしょうか。

**鈴木長官** それは本当に大事な話で、当然、文科省を飛び越えてしまうわけにはいかないので、文科省と文化庁とスポーツ庁でそういう話をすることはこれから可能だと思います。今文化庁でも部活動の見直しというような話が出てきたと思います。お互いが何をやっているかというのをよく考えながらそういう話になってきたと思うんですけれども、いいことだと思います。

**編集部** ぜひお願いしたいです。

**鈴木長官** 確かにそうですね。

**編集部** 中学校から始まる部活動の意義や価値についてはどうお考えですか。

**鈴木長官** 身近にスポーツをする、できるという意味では、部活動というのは非常に大きいと思っていますし、これまで日本のスポーツを支えてきてくれたのは部活動ですので、当然理解もしていますし、敬意も表したいと思っています。世の中に出ると、今は携帯でもスマホでも、調べれば何



でも出てくるじゃないですか。ですから、記憶するというよりは、答えをどう導き出すのかというのが学校の学習では非常に重要な点です。そういう意味では、部活動というのは、何か目標があつて、それに一途に到達しようという力も身に付くだけではなく、人間関係とか、協調性と自立・主体性等、いろいろ学ぶことがあつて、社会に出て役立つことがたくさんあります。ですから、部活動も当然教育の一環として、間違いないことだと思つています。今後、部活動は地域に委ねていく方向にならざるを得ないんですけれども、意義というのは引き続きあつて、非常に重要な教育的価値の高いものだと思つています。

ただ、先ほどの話に戻りますが、都会と地方では、また違ふと思ひます。多分都会の方は御理解いただけないかも知れませんが、地方に行くときチームすら組めない状況があります。以前、江東区の女子のサッカー部を視察しましたが、学校単位ではチームが組めないのです。東京ですらそれですから、地方は何をかわんやなんですね。チームを組めないんです。部活動というのは地域に委ねていくしかない。

あと、いろいろな選択肢を与えようとする、学校の先生だけでは賄い切れないですよ。三つも四つも顧問をもつわけにいかないし、みんなで子供を支えていくというふうな考え方をしているかたもたないですね。特に地方はそうです。

**編集部** 都会でも、野球部等、人数が必要な部はなかなか厳しくなつてきて、野球部かサッカー部かどっちかしかつかれないとかいう学校がだんだん多くなつてきています。

**鈴木長官** 野球かサッカーかなんて究極の選択で、もつといろいろ選択肢を与えないといけないと思ひます。そうすると、地域で学校の施設とか地元施設の施設を利用しながら部活動として活動していくというふうにならざるを得ないかなと思ひます。

**編集部** そういう意味では、少子化とか社会のいろいろな変化に応じて、これからの部活動の在り方は変わっていくかなければいけないということですね。先ほど長官が言われたように、我々教員も、ある程度の時間になつたら、今度は地域の人たちと同じ立場で指導者として部活動に関わっていく。もう自分の部という世界ではなく、我々教員も考

え方を変えていかななくてはいけない時代にだんだん入って  
くるということですね。

鈴木長官 そういうことですね。

江東区の女子のサッカー部を視察したときにおもしろい  
など思ったのは、近隣の中学校が集まって部活動として活  
動しているところがあるわけですよ。要するに、中学生に  
とって中学校の世界というのは人生の全てみたいなどころ  
があつて、例えばいじめに遭つた、そうしたら人生終わり  
みたいな気持ちになつちゃうんですけれども、他校の中  
生と一緒に活動していると、また違う世界があることで結  
構救われるんですよ。何だ、自分たちのこれだけの世界  
じゃないんだ、こつちの世界もあるなと、何か救われるよ  
うな気持ちになるという話も聞いて、いろいろな世界、い  
ろいろな人と交わることも必要なかなという気がします  
ね。ここだけで世界が終わるといふと辛くなるけれど、こ  
ういう世界もあるんだ、こういう人たちもいるんだ、こ  
ういふ気の合う仲間もいるんだといふふうになれば、視野が  
広がって、人生も変わってくるのではないでしょうが。

編集部 部活動の顧問が王様のように君臨しているような

部活動を体験してきたので、自分もそうやってチームをつ  
くつていこうとする先生たちがまだまだいると思うので、  
大学スポーツでも問題になつていますが、それはだんだん  
変えていかなければいけない時代になつてきているとい  
うことですね。

鈴木長官 もちろんです。そういうのを一掃するためにも、  
いろいろ改革しなきゃいけないと思つていきます。

編集部 まず子供たちが本格的にスポーツに触れる中学校  
の部活動からそういうものを変えていく。

鈴木長官 中学校も高校も大学も今変えようとしています  
よね。

編集部 生涯にわたつて楽しめる、そういうスポーツ環境  
をつくつていかなければいけないということですね。

鈴木長官 その背景には、医療費の高騰とか、体を動かす  
ことの重要性とか、いろいろ絡み合つてくるんですけれど  
も。

編集部 部活動は、勝利を目指しながら活動しています  
でも、その中で勝てる人というのは、例えば世界チャンピ  
オンなんか世界に一人しかないわけ、あとはみんな簡

単に言えば敗者だし、世界チャンピオンだつてずっとチャ  
ンピオンでいらなくて、いつかは負けてしまふわけで、  
勝つことよりも逆に負けることに価値があるぐらいの気持  
ちを僕は持っているんですね。でも、勝つことを目指して  
いるからこそ負けることにも価値が出てくるような気がし  
て、部活動にはそういうよさというか価値があると思つて  
いるんです。そのバランスがとても大事で、一方では勝利  
を目指し、でもスポーツのよさも分かつてもらいたい、こ  
をどうしていけばいいんだろうというのは、部活動の指  
導をしていた人間として、今自分の中でジレンマがあるん  
ですけれども、そのところはいかがですか。

**鈴木長官** すごく重要な視点だと思っています。確かに人  
生というのは、負けを受け入れて学んでいくことでもあり  
ますよね。どんな選手だつて最後は引退して負けるわけ  
ですから。そういう意味では、勝利至上主義的な、高校野球  
もそういう面があつて、どうしても勝者がたたえられる。  
これはいいことなのですが、同時に、正々堂々と負けた選  
手たち、生徒さんたちにもねぎらいの言葉をかけていくよ  
うな、「よくやったね」と認めていくような、そういう社

会にしていかなきゃいけないと思つています。

今は、勝てば何でもいいだろうと、他人の道具を壊すと  
か薬品を入れるとか、いろんな問題が出てきまして、思つ  
た以上に深刻だと思つています。それはマスコミもいけな  
いんですね。堂々とスポーツマンシップのつとつて負  
けた人なら、すばらしい勇者だということでもどんだんた  
えていくような、そういう社会にしていかなきゃいけない  
と思つています。「グッドルーザー」という言葉もありま  
す。よき勝者も必要ですけれども、よき敗者も必要で、そ  
の辺がこれからのスポーツの、我々の課題だと思つていま  
すので、これは本当に一生懸命やっていきたいと思つてい  
ます。

**編集部** 最後にオリンピックのお話を伺います。

二年後にいよいよ迫っているんですけれども、全国の中  
学生とか中学校に期待されることは何ですか。

**鈴木長官** 今の話とも少し重複する部分はあるかと思いま  
すけれども、スポーツというのは、スポーツマンシップと  
か、潔さとか、正々堂々と戦うとか、爽やかさだとか、前  
向きでポジティブな、そういうものなんですよね。ですか

ら、そういうのをどんどん推進していけるような教育をスポーツを通じてやっていかなければならない。オリンピック・パラリンピック教育を通じてやっていきたいと考えています。



小学校のときに「ゼッケン67」という国語の教材があったんです。これは東京オリンピックのときの一万mの選手の話で、スリランカの選手がずっと走っていたんだけど、周回遅れ、遅い選手だったんですね。もう一位の選手がゴールしているのにまだ走っている。もう終わりかなと思ったら、あと一周か二周くらい走る。正直者の話なんですけれども、これが私はずっと心に残っています。スポーツの話というのは道徳の話になったりすることが結構多くて、スポーツを通じて心を育てるような、そういうことができるんですね。こういうことは二〇二〇年を機にもっとどんどんやっていければいいなと思っています。

編集部 「オリパラ教育」と言われて、東京はすごく盛ん

なのですが、他県では、近県でもまだ盛り上がっていないところがあります。こんな仕掛けをしていくとか、策はあるんでしょうか。

鈴木長官 オリンピック・パラリンピック教育に関しては、我々もプロジェクトとして力を入れているところでもあるので、その状況はいけませんね。全国的にしていけないといけないんですが、オリンピック・パラリンピック教育に関してはいろいろなやり方があると思います。私、オリンピック・アズ協会の会長というのをやっているんですけども、全国にちゃんとお金を払って登録している方が一千何百人いるし、日本のオリンピックというのには三、四千人いるんです。全国各地にいますので、そういった人たちにオリンピックに行ったときの話をしてもらうとか、人生について話してもらうとか、あるいは演技を実際にやってもらって僕なんかもう五〇を超えていますけれども、泳いだりすると「おー」なんてまだ言ってくれますし、それなりに子供たちが「おっ」となるような、そういうものだと思いますので、そういう実体験を通した授業なんかもやりたいと思っています。

**編集部** 東京は開催都市でもあるので、ここ数年で、オリンピックの方やパラリンピックの方が学校に来てくれるということがすごく多くなりました。子供たちがメダルを触らせてもらったり、ユニフォームやジャパンの制服を着た姿で話をしてくれたりということ、すごく身近になったのは間違いないと思います。そういうことがあと二年の間に日本中に広まっていったほうがいいです。

**鈴木長官** 地方のほうはまだまだというのは課題ですね。

**編集部** 長野オリンピックのときは、一校一國運動ということで、来てくれる国とつながったという話を聞きました。

**鈴木長官** さっきの話に戻りますが、オリンピックやパラリンピックに絡めて他の教科の授業もやるとおもしろいんじゃないかと考えています。理科だったら、砲丸投げの玉は何kgとか、国語なんかも、「ゼッケン67」じゃないですけども、どんどん絡めていけると本当はおもしろいと思います。

**編集部** 来年から中学校でも道徳が教科として始まります。各教育委員会が教科書を選択している段階ですけども、スポーツの教材は増えたと思うので、そういう意味では、

長官が言われたように、いろいろな教科にまたがって進めていくことが我々がやっていかなければいけないことなんだろうなと思います。

子供たちには東京オリンピックをどんなふう to 受けとめてほしいですか。

**鈴木長官** まず、選手で出てもらうのが一番いいんですけども、なかなかまだ年代的に難しいかもしれません。ボランティアも年齢制限があるんですね。今一生懸命、ボイスカウトで、指導者がうまく統率できる自信があるならばボランティアをさせてもいいんじゃないかとかいう議論は出ていますけれども、できれば何らかの形で子供たちにも本来は関わってもらいたいんです。ですから、大いにオリンピック・パラリンピックを見に行つてほしいですね。

**編集部** 生で見たいということですね。  
**鈴木長官** ぜひ、生で見たいですね。生を見ると多分考えが変わるかと思えます。パラも含めて、「おー、すごいな」と実感できると思います。

ここで「J・S・T・A・Rプロジェクト」の話をさせてください。部活動は、一つにこだわらなくていいんじゃないか



という話もガイドラインに少し盛り込みました。いろいろな種目にチャレンジしてもらおうことで本当の自分の才能を見極められる可能性があります。それから、同じ種目をずっとやっていると同じ箇所に負担がかかるので、けがにつながるかもしれない。飽きちやうかもしれない。バーンアウトになるかもしれない。シーズンごとに四つのスポーツをアメリカのようにやってもいいだろう、そういう考えもあります。

皆さん、体力・運動能力テストというのをやられていると思いますけれども、あの数値を入力していただく。そうすると、自分で気付かなかった能力が明らかになり「君いいね」となって、競技団体が「来てくださいよ」ということになるかもしれません。そうして、どんどん上の段階に行くのと国が丸抱えで強化費を出してくれる、そういうアシリート発掘のプロジェクトになっているんです。これは七月から募集をかけたところです。(今年度は募集終了)

特に高校野球とか中学校の野球とかも含めて、野球とかサッカーに人数が偏っているじゃないですか。ただ、部活動を変えたらスターになれる可能性があるわけです。これをどんどん校長先生方にも奨励いただいて、「他の競技も

やってごらん」という働きかけをお願いしたいと思います。これは今、スポーツ庁、JOC、JPC、日本スポーツ協会、全部一緒になってやっている国家的事業なんです。これから少子化ですけれども、我々の強化事業というのは競技力を強化するためにも続けていかなきゃいけないんですよ。

**編集部** 二〇二〇年で終わるわけじゃない。子供たちはスポーツを生涯やっていくわけですよ。

**鈴木長官** むしろこれから大事なんですね。二〇二一年以降、予算は削られるかもしれないけれども、どんどん強くしていくためには、アシリートの発掘あるいは転向が必要です。「J-STARSプロジェクト」は入力するだけでいいので、ぜひ校長先生方にもお願いしたいと思っています。

先ほどの話とまたつながってくるんですけども、オリンピック選手を育てた先生だけが偉いわけじゃないんです。メダルを取らせ



た先生だけが偉いわけじゃないんです。いろいろな先生に影響を受けて一人の選手が育つわけで、競技の手ほどきをした先生も偉いんです。その競技を紹介した人、選手にした人、それぞれの先生が偉いんです。こういう一人の選手が育つときの先生たちをどんな我々も表彰、評価しているかと思っていました。

同時に、学校の先生の仕事というのは生徒さんの可能性をどんどん引き出して育てていく仕事じゃないですか。ですから、その部活動だけじゃなくて、「おまえはこつちのほうがいいよ」と、これぐらいの度量で、自分で抱えるんじゃないかと、「こつちが向いているんじゃない？」とか、それこそがすばらしい先生だと私は思っています。

**編集部** もう考え方を変えていかなければいけないということですね。

**鈴木長官** それをもし校長先生の皆さん方に御理解いただけたら、どんなネズミ算式に先生方の考え方が変わっていきますので、お願いしたいと思います。

**編集部** 我々も自分がやっていた部活動の考え方が根っこにあるから……。

**鈴木長官** 絶対そうだと思います。

**編集部** いろいろな競技を経験して育っていきながら、その中で柱になるものをだんだん見つけていくということをしたいと思います。中学校の頃から「これしかない」みたいな考え方で指導したり、子供たちも始めてしまうと、辛くなったりするんでしょうね。

**編集部** アメリカなんかだと、いろいろなスポーツをやると言いますよね。

**鈴木長官** やります。

だから、選手にとつて一番いいスポーツを選べるんですよ。「私はこつちが向いているな」とかですね。そういうふうになっていくと、自然と向いている人たちがその競技をやるようになる、あるいは好きな人がやるようになる。これが大事だと思いますね。日本だと、その部活動がない場合がありますからね。また、先生と相性がいいかどうかとか、先輩はどんな人がいるかとか、いろいろなことがあります。

**編集部** 自分たちもそうでしたし、今の顧問の先生たちを見てもそうですね、自分の部に入ったからには、それを一生懸命やれという指導をしまつて、部活動が第一で兼部なんて認めないとか、そういう面はまだまだある

と思うので、そういう考え方自体を変えていくところに今来ているのかもしれないですね。長官のお話を伺っていて、我々がもっとそこを変えていかなくてもいけないと思いましたが。その一つの象徴が「J-STARプロジェクト」なんです。

**編集部** オリンピックを見ることで、こんなスポーツがあつて、こんなすごい人たちがいっぱいいるんだというのを子供たちが実際に感じられるというのはすごく幸せですよ。まさに人生の中でそんなにある機会じゃないし、この機会は本当に無駄にしたいくないと思います。

**鈴木長官** オリンピック・パラリンピックは、いろいろなスポーツがあるということを見る機会にもなりますからね。「この競技だったらできそうだな」というのもあるでしょうし、サッカーや野球をやっていた人は基礎体力はあると思うので、他の競技へ行っても多分そこそこやれるんじゃないかと思えます。

これから、大型ショッピングセンター等で「J-STARRプロジェクト」のイベントをやります。ちよつとした体力テストみたいなのをやって、「あなたはこれがいいよ」みたいなイベントです。いろいろな仕掛けをしながらアス

リートを発掘していこうと思っています。

あと、一つお伝えしたいのは、学校のスポーツ施設、体育館とかありますよね。あれをどんどん開放していただいて、地域の人たちに使ってもらう、こういうのをこれからお願いしていかなければと思っています。今、国民のスポーツ実施率というのをどんどん高めていくんですけれども、身近にあるのは学校ですよ。ちよつと歩いていけるのは学校なんですよ。学校の体育館とかグラウンドとかプールとか、スポーツ施設をどんどん開放していただいて、民間の人たちに運営を任せる。万が一何か事故が起こっても校長先生の責任にしないような仕組みを我々はつくっていきます。何か事故あつたら困りますよね。それはもつともだと思えますよ。そういうふうにさせないような仕組みを考えていかなきゃいけない。基本的には、自己責任をもつと考え方として普及していかなきゃいけないと思つていますけれども、地域でちゃんとした指導者がちゃんとした指導をして、そういう施設を使いながらどんどんスポーツ実施率を高めていく、こういうことが大事だと思つています。

池田小学校の事件からみんな塀をつくるようになってちよつたんですけれども、逆です。どんどん広げて、地域

でみんな子どもを守ろう、そういう方向に発想もまた転換していかなければいけないと思っています。

**編集部** 校長の責任まで考えて事業を進めていただけるのは大変ありがたいですし、可能性を感じますね。

**鈴木長官** 多分、やらせたくなくてやらせないわけじゃないと思うんですよ。

**編集部** そうなんです。仕組みが整っていないのでなかなか開放できない面があります。

**鈴木長官** 何かあつたら困るといふのは当然あると思いますが、もつたいたいと思うんですね、ああいう学校の施設とか。これはやっぱり使わせていただきたい。東京なんか、それをやらないと無理です。

**編集部** 最後に、全国の中学校の校長先生方にエールやメッセージをいただけたら。

**鈴木長官** 私も教員をやっていたことがありますので、教員の皆さんの仕事の大変さも分かりますし、やりがいというのもよく分かっています。教育業というのは、直接それによってGDPが倍になるとか、そういう仕事じゃないんですが、人を育てる仕事というのは一番やりがいのある仕事のひとつだと思います。社会を変えることができます。

事でもあります。人を育てるといふのはそういうことです。ので、ぜひ信念をもって、明るく活力ある国にしていく。人を育てるといふのは非常に重要なので、ぜひ今後また引き続き御活躍いただいて、いい人材を——これはスポーツもそうです。人を育てる仕事ですので、そういう意味では共通点もあります。ぜひ皆さんと一緒にやって、いい日本の若者を育ててまいりたいと思っていますので、よろしくお願いいたします。

**編集部** ありがとうございます。

